

宮古市田老地区民生委員児童委員協議会

(平成 26 年 9 月 19 日掲載)

(1) はじめに

宮古市は、岩手県の県庁所在地である盛岡市から約 90km 東に位置しています。私たちの田老地区は、宮古市中心部から約 10km 北に位置し、地区内 1,380 世帯を民生委員・児童委員 25 名（うち主任児童委員 2 名）で担当しています。

過去の大津波被害を教訓として、世界最大規模と言われた高さ 10m、長さ 2,433m の津波防潮堤が築かれていましたが、東日本大震災の津波では、この防潮堤も崩壊し、街の中心部の 9 割が一瞬にして破壊され、死者 184 名、建物被害は 1,830 棟に上りました。委員 14 名も住宅に被害を受け、応急仮設住宅やみなし仮設住宅に入居しています。



震災直後の街の様子



避難所の様子（当時）

(2) 現状紹介

① 被災者の状況

震災直後は、物資の不足や生活環境の著しい変化で、多くの住民が避難所で生活していました。その後、応急仮設住宅への入居を経て、現在は、災害復興公営住宅入居や来年 9 月の高台移転に向け、これからの希望が見え始めています。しかし一方で、転居費用や転居後の生活費など経済的な不安を抱える住民もおり、また同じ思いを抱える委員もいます。こうした住民の不安に対する具体的な解決策を見出せないまま、住民の傾聴活動を続けている状況です。

② 子どもたちの様子

応急仮設住宅が建設された当初は、遊び場や遊具もなく、震災による悲惨な状況を忘れようとするかのごとく、ただ走り回っている姿が見られました。その後、応急仮設住宅に集会所ができると、少しずつ落ち着いた様子が見受けられ、ボランティア主催のイベントにも楽しそうに参加しています。

震災の影響で、環境の変化によるストレス、学習の遅れ、運動不足等は多々あると思われていますが、子どもたちの大きな声が響き渡り、活気を取り戻しつつあります。

③ 応急仮設住宅での孤立防止

社会福祉協議会が仮設団地内の空地に長イスやテーブルを設置したところ、住民が気軽に集まり、相互交流が図られるようになり、この場を活用したサロン活動も行なわれるようになりました。徐々にサロンの参加者も増えてきましたが、一方で、ひとり暮らしの方の中には周囲の住民と交流を持たない方もいます。そうした方には、生活支援相談員、ホームヘルパー、保健師等が定期的に訪問し、ねばり強くイベン

トやサロンの開催案内をしています。また、ひとり暮らしの方が孤立しないよう、民生委員が戸別訪問し、状況把握に努めています。

④ 委員活動

震災後、多くの住民が応急仮設住宅に入居したため、担当区域の見直しを行ないましたが、親戚宅に居住したり市外へ転居するなどして所在不明の住民も多く、震災前のような状況把握は困難で、対応に苦慮する状況が続きました。

一方、このような状況を踏まえて、地区民児協で、住民情報を交換する機会を多く持つように努めたことで、委員相互の交流は以前にも増して深まっているように感じます。今後も社協や行政との連携を図り、委員活動に取り組んでいきたいと思えます。

⑤ 今後の課題

高台移転に伴い、担当区域の見直しが必要になることや、被災した委員が遠方に転居して欠員が生じた場合、後任者の選定に苦慮することが危惧されます。

(3) 全国の委員へ

震災後、全国の皆様から多大なご支援を賜り、励ましの言葉で元気をいただきました。また、多くのボランティアの方がたにも助けられました。大変ありがとうございました。今後も復興に向けて頑張りますので、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。